

『キリスト教講話集Ⅳ』

2017年09月04日

井上良雄先生の『キリスト教講話集』の4巻目『待ちつつ急ぎつつ』が出版された。井上先生はカール・バルトの翻訳者で、説教、聖書購解、その他諸々の本を出しておられる。これらの著作は日本の教会の良心として、多くの人々に読まれて来た。

井上先生は、私の神学生時代、ドイツ語の教師をしておられた。神学校では毎日、礼拝が捧げられていた。礼拝をさぼる学生もいたが、井上先生が説教をされる時は、皆出席していた。それほど、井上先生は尊敬されていた。私は卒業してからも、幾度か講演を聞く機会を得た。『キリスト教講話集Ⅳ』を、真っ直ぐ立って、誠実に淡々と語る先生の声を聴くような思いで読んだ。教えられ、触発されたことから、私の言葉で書いてみたい。

キリスト者は信仰告白に生きる者である。信仰告白文は教会の中で作られたものなので、意味を持っているが、決定的なものではない。キリスト者の信仰告白は「イエスは主なり」という決定的な告白である。この告白はイエス以外に神はないという告白である。私たちの周りには、神の装いを持って、追従を迫るものがある。それらに追従せず、イエスのみを主と告白して、従うのがキリスト者であり、その者たちが集う場が教会である。

なぜ「イエスは主なり」と告白するのか。フィリピ書2章6節～8節に「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」と書かれている。イエス・キリストは真の神であられたが、自らを無にして人間の姿で現れ、僕となられた。僕となられたイエス・キリストは十字架の死に至るまで神への従順を貫かれ、人間の罪を赦し、義としてくださった。徹底的なへりくだりによって、神であることを示されたのである。

次の9節で「このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました」と書かれている。神は十字架の死まで降られたイエス・キリストを神のもとまで高く引き上げられた。神から人間への無限の下降、そして人間から神への無限の上昇、この二つのことを通して、人間に義を与え、聖なる者としてくださった。この救いを与えてくださったので「イエスは主なり」と告白するのである。

極めて教義学的な認識であるが、私は、主イエスの十字架によって罪の赦しという是認宣言を聞き、主イエスの復活によって神の命に与る救いを得た。それは、生きることは空しいというニヒリズムからの解放で、生きる意味を見出した私の身に起こった信仰の出来事である。この救いは全ての人に、既に与えられている。そして、パウロはローマ書10章10節で「実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです」と書いている。心で信じたことを口で公に告白することによって、全き救いに与る。心と口は一つであり、信仰は精神的な魂に関わることで、社会とは関係ないとする認識ではない。「イエスは主なり」という告白はキリストの主権は全てに及んでいるという告白である。

ドイツの告白教会はヒトラーへの脅迫的な追従命令に対し、「イエスは主なり」の告白に基づき、不服従の闘いを展開した。戦時中、日本の教会は皇国史観に飲み込まれ、天皇を神とし、戦争に協力し、隣人をないがしろにした。それを懺悔し、謝罪の「戦争責任告白」を出したのである。私は、神が是認してくださった人間の尊厳を否定する諸々の出来事に対し、「主イエスは主なり」の告白に立って「ノー（否）」と表明したい。隠退してから、時間を与えられ、九条を守ろう、原発を止めようと市民運動に加わっているが、私の信仰告白のつもりである。